

わたしの気づき

経営情報学部3年 長田 華山

私は、つながりに気づくということが本当の学びだと思う。

私が多摩大学と初めて出会ったのは母校である都内の工業高校で開かれた大学合同説明会で、「ここは自分にいいな!!」と思ったところからである。

そのころ私は、史上最年少選手として実業団自転車プロチーム（東京ヴェントス）に所属し、放課後の練習に没頭していたこともあり、大学進学は正直なところ二の次であった。

ある日所属チームの監督から、「東京オリンピックプレ大会の一環で、大学でイベントを開催することになったからよろしく・・・」と唐突に言われ、訪問した先が、偶然にも多摩大学（多摩キャンパス）だったのである。

その後、2020年4月に無事に多摩大学に入学した。

現在では、静岡県のプロチームに移籍したのち、大学での学びに専念するため、自転車競技の第一線から離れたのだが、ありとあらゆるものに対して「出会い」を大切にしながら大学生活を送っている。

多摩大学の良さと特徴を一言で表すならと誰かに聞かれたとき、私は「出会いの場がたくさん転がっていること」と即答するだろう。

趙佑鎮教授の「アントレプレナーシップ論」で、ある特装車（トラック）の中古販売を行う会社の社長と出会い、トラック業界に強い興味を持っていたことから、自ら複数回にわたり、インターンシップをお願いし、学びの場を頂いた。

高度成長期後の日本の特装車業界の状況は、韓国企業の攻勢に押される一方であるというのが実態であろう。日本国内のニーズや風潮に溶け込み、日本法人に日本人社長を置くことで韓国企業と思わせない、異質なマーケティング方法は、金美德教授の「韓国経済論」で得た知識である。インターンシップを受けて企業での体験と驚くほど仕組みが合致しており、授業での学びと実体験が一つにつながったのである。

数年前、タイで開催された自転車レースに参戦した際に、東南アジアからの参加者のなかに、マレー系でもインドネシア系でもなく中華系の顔立ちをした方の多さを不思議に思った。その答えは今年になって判明したのである。

パートル教授の「中国経済論」と所属する「インターゼミ（社会学研究会）」において、タイ国内の華人華僑は総人口の約12%も占めていること、そしてタイを代表するCPグループという大手コングロマリットは実は華人財閥であることを知った。高級ロードバイクを手に入れている人の多くは、華人華僑であったという必然性に気づく体験となった。

私はつながりに気づくように日々努力し学びを重ねているが、時には日本や世界経済の明るい将来を展望すると同時に、そこに潜む様々な危機に気づくこともある。先行きが不透明で将来の予測が困難な時代の中で自分の将来を考えるうえで、多摩大学での学びは自分の今後の人生や生き方に大きな影響をもたらすことになると思う。つながりに気づく、そんな学びが面白いのだ。



(写真左上) ロードバイクに乗る筆者

(写真左下) インターゼミでの話題提供

(写真右) ゼミ終了後の懇談

最後に報われた 長かった4年間

グローバルスタディーズ学部 4年 清水

同い年は誰1人いなかった。冒頭から何を言っているのかと思われるかもしれませんが、私は一度社会に出てから大学に入学しています。ですから当然同い年の同期などいません。学生全員が年下にあたります。年齢差があり苦勞することになるだろうと覚悟はしていましたが、これが本当に大変でした。まずはプライドの服を脱ぐ作業から始まり、大学ではどのように適応すればいいのか悩んでいました。最初は年齢や経歴を隠して過ごしていましたが、そんな時に会ったのが教職課程でした。

最初は教員になることに興味はありませんでしたが、学び直したいと大学に入学したこともあり取得できる資格は取得しよう精神で教員免許取得の旅が始まりました。小、中、高時代の私なら教員と腹を割って会話をすることはハードルが高く出来ませんでした。教職課程の授業では自分自身と向き合い自己開示をする場面が何度もありました。そのおかげもあり人生で初めて本気で先生に相談をしました。すると温かい言葉やアドバイスを下さり今まで1人で悩んでいたことが徐々に解決に向かっていきました。人と関わることの大切さを改めて感じ、そこからは積極的に大学の先生や多くの学生と会話をしたり、サークル活動に参加したりすることで人の輪を広げていきました。ここまでが1、2年生編です。

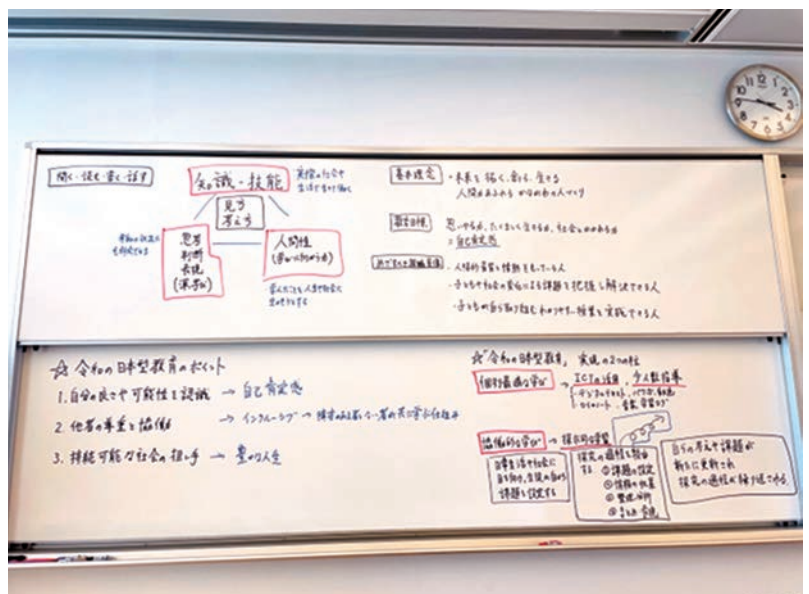
さあ大学も後半戦。3、4年生編突入です。ここまで聞くと上手く適応したのだと思うかもしれませんが残念ながら悩みはつきません。

勉強面ではなかなか結果が出ず悔しい思いをし、他者と比較して自分は負けていると決めつけ自己肯定感傷だらけの日々でした。将来のことも考え始め教員になるかならないか迷っていました。そんな精神状態の中でも大学の講義は多くの学びがあり毎回、有意義な時間でした。難しい講義もありましたが必死に食らいつきました。何故、諦めず挑み続けることができたか？それは大学教員の皆様のおかげだと考えます。多くの先生に相談に乗っていただきました。お忙しい中、1人の学生のために時間を取って下さり本当に感謝しかありません。特にゼミナールでもお世話になっている山田大介教授は私を最後まで信じてくれました。2年生の時から英語の勉強や模擬授業を見て下さいました。この4年間で「大丈夫！」という言葉かけた選手権があれば山田教授が1番だと思います。

最後に「それで進路は結局どうなったの？」と思うかもしれませんが沢山の人の助けのおかげで無事、教員採用試験に合格することができました。最後の最後まで教員になる資格はあるのかと悩んでいましたが教育実習先に恵まれたこともあり不安は無くなりました。もう1度生徒と関わりたい。悩み苦しんでいる生徒の助けになりたい。私自身がこの4年間で沢山悩み苦しんだ分、先生の存在が生徒にとっては大切だと実感しました。これから出会う生徒の手助けになりたいと思ったのも、この大学で素敵な先生に出会えたからだだと思います。また大学職員の方々、清掃員の方々がいっつも気さくに声をかけて下さるので夜遅く誰もいない校舎の中にも光を見出すことができました。ありがとうございます。私自身、これからがスタートなので残りの大学生活を無駄にすることなく、より一層精進して参ります。



4年間共に歩んだ相棒（教職支援室）



教員採用試験に向け自主学習する日々